

けばすぐ来て直したり、造ったり、一緒になってやってくれた。鑄造技術は理論外のコツがあるから仕事の中から覚えた。坂口さんはいつも鑄造場について黙々と自分の仕事をしていて。人と喋っているところは見たことがない。展覧会に出品したり、美術団体に入ったり一切しなかった。学生たちは尊敬していた。愛称はドンちゃん、温情の深い先生だった。

上野の山は、日が暮れると長い棒を肩にした人が来て一つ一つガス灯をともして行く。森がガス灯で青白くにぶい光になると、美校生たちは山から下りて街へ繰り出した。屋根の上に大きな瓢をのせた堂々たる店構えの割烹店「東仙閣」で、私たちの新入生歓迎会をしてくれた。その顔ぶれは、津田信夫、沼田一雅、坂口脛、杉田禾堂、高村豊周の諸先生と、学生は十三人の上級生に三人の新入生だった。それはびっくりするような豪華な会で料理にお銚子が並び、芸者が大勢きた。こういう席は生れて初めて出くわしたので、身のおきどころがなく、戸惑うばかり、上級生の唄や踊りに入れずに芸者の酌は受けられず、緊張しっぱなしだった。先生は悠然と芸者相手によりしくやっていた。カフェー「新世界」は大きな西洋風の店で行った。その頃は気風のいい美形の女給さんが大勢いて、美校生を大事にしてくれた。

美校生の唄と踊りは天下御免だったが、銀座の資生堂角の交番では大目玉をいただいた。銀座方面になると通用しなかった。彫刻の石井鶴三の学生時代「明治三十八年〜四十三年」に相撲が非常に強くて、美校が学生相撲の雄となった。学生相撲大会の会場は両国の国技館で、応援団の奇想天外の有名な応援がされた。各自勝手に仮

装に扮した集団が、突如奇声を発し綱にぶらさがって注目を集め、得意の唄と踊りが始まる。そしてそのあとに必ず「負けてやーれ、負けてやーれ、負けてやーれ」の合唱が何回も続いた。

⑧ 『美術研究』

昭和四年二月、校友会文芸部より『美術研究』が創刊された。『東京美術学校校友会月報』第二十八卷第二号の「文芸部記事」には『美術研究』編集部より」と題して岡田秀雄がその紹介記事を寄せており、冒頭に次のように記している。

演劇部、圖書部、近代藝術研究部の三部の提唱の下に畫策され、その創刊號を前學期末に至つて漸く出す事の出來た『美術研究』は、其後、文藝部内の映畫部及びエスペラント部の加入に依つて、茲に第四號は五部共同の研究發表機關として諸君の前に送り出される事になりました。五部の機關紙とは言へ、同人雜誌と類を異にするこの『美術研究』は、決して、一部の愛好家の意志を代表し、或は少數の生徒の言論の機關として存在するものではなく、實に新しい美校の精神と元氣潑刺たる全校生徒の抱負を反映しつゝあるものと言はなければなりません。でありますから、この雜誌には、新時代の美術に對する吾々の喜び、不安、疑惑、懊惱。あらゆるものがその中に包括せられねばなりません。

この雜誌は文芸部の生徒が自主的に発行したものであり、また、当時一般の学生の間で盛んであった左翼思想と関連があった点で、

特筆すべきものと言える。この雑誌は合計九冊発行されたのち発行停止を命ぜられた。原本は青木茂氏および東京国立文化財研究所蔵本とよって全号を通覧できる。故須山計一氏の話では、この雑誌は小松益喜、佐藤敬、木下幹一の三人が編集し、後から岡田秀雄も加わり、財政面は木下が負担したというが、編輯印刷兼発行人は創刊号から第一巻第五号までが木村郁太郎、同第六号から第二巻第一、二号合併号までが岡田秀雄、第二巻第三号（最終号）が町田成郎となっている。内容目次は次のとおりである。

第一巻第一号 昭和四年二月

発刊の辞

美意識の変化について

1930年展を見て

洋風回顧展雑記

築地について

芝居を観た後

同第二号 同年四月

扉・ピカソ像 ジャン・コクトウ筆

口絵・デッサン ケエテ・コルウイッツ筆

造型美術と社会

美術に対する一つの展望

灰燼

市俄古雑談

カルチエ・ラタン

Cinéma Ciné Siècle

無断借用・THÉÂTRE

Donner des Nouvelles

海外消息

同第三号・現代作家批判特輯号 同年五月

口絵

女 パブロ・ピカソ

モンルーデュの大通 モーリス・ユトリロ

所刑者 デオルグ・グロックス

人間は善良だ ゲオルグ・グロックス

淫売婦 オット・ディックス

象徴 ラ・セルナ

ピカソに就いて

MAURICE UTRILLO

ジョルジュ・ルオール

ゲオルグ・グロックス

オットウ・ディックス

シユール・レアリズムをかく考へる

同第四号 同年六月

口絵 肖像 A. DERRAIN

穀物庫（貯蔵室と分配橋を望む）在シカゴ メンデルツ

ーン撮影

Des Nouvelles Etrangères

工芸に対する一考察

春陽会展を見て

淵上 満夫

榎原 健三

中村 秀夫

木下 幹一

佐藤 敬

中村 茂雄

森 新一

春日 清彦

榎原 健三

角 浩

赤塚 時雄

美術研究時評

- 1 春陽会
- 2 演劇の映画化
- 3 トーキョーに就いて
- 4 「生ける人形」と「大都会」
- 5 現代的な芝居
- 6 最近の傾向
- 7 トラストD・E・8 役者
- 9 大衆的
- 10 中央美術の休刊

Gens de Palette

Quartier Latin

映画に現れた E. V. STROHIM と G. W. PAPST

生ける人形

映画道冒瀆者オール・トーキー

偉大なるかな映画

FLASH BACK

同第五号 同年七月

Des Nouvelles Etrangères

口絵 ポプラ SEGONZAC

オペラ Love for the three Oranges の舞台(写真)

解体の芸術、分散の芸術

日本画の歴史的梗概

美術研究時評 1、2、3、4、5、6、7、8、9

1 価値の問題 2 展覧会 3 第一美術協会展

4 国際美術協会展 5 「東京行進曲」 6 「世界大戦」 7 「劇場街」

8 「森茂左衛門」 9 「ヘアの旅」

Quartier Latin

Gens de théâtre

特別附録 新世紀を歩む人々

- アーキベンコ(彫) アベル・ガンス(映) アルヒーポフ(画) アコブ・ギルドヂャン(彫) ヴェルトフ(映) ウォルター・ウッズ(映) ヴラマンク(画) ウェルマン(映) エイゼンシュタイン(映) エルンスト・デ・フィオリ(彫) エルウィン・ピスカートル(演) オットー・ディック
- ス(画) カンディンスキー(画) カール・フロイント(映) カールドレイエル(映) カール・ホフマン(映) キスリング(画) キリコ(画) キリヤコ・ギーカー(画) グロッス(画) グロビウス(建) グズネツォフ
- (画) ゲオルグ・カルス(画) コルビジュエ(建) コンチャロフスキー(画) コルウィッツ(画) ザッキン(画) シャガール(画) ジョアン・ミロオ(画) シレビヤノフ(演) シェスターコフ(演) ジャン・エプスタン(映) シューテレンベルグ(画) ジョン・メーシス(映) ジュール・ファスマン(映) ジャン・コクトオ(演・画) シュリンプ(画) スゴンザック(画) スーティンス(画) スタンバーグ(映) タイロフ
- (演) タトリン(建) チャアリー・チャップリン(映) テレシニコウイチ(画) テア・フォン・ハルボー(映) デュボン(映) トラゴット・シュミラー(演) ドラン(画) ハンス・ベルツィヒ(建) パスキン(画) パウル・レニ(映) パプスト(映) ハンス・シネーベルゲル(映) パウル・フェヨス(映) パプロオ・ピカソ(画) ピカビヤ(画) ブドウキン
- (映) ブルーノウ・クラオスコップフ(画) ファラチイ(映) ファンク(映) フレスネエ(画) フリッツ・ラング(映) フランシス・メリアン
- (映) ベトロフ・ワオドーキン(画) ベス・メレデス(映) ポアリエ
- (画) ボザージ(映) マシコフ(画) マチス(画) ムルナウ(映) メイエルホリド(演) メリヤン・クーバー(映) ユトリヨ^[マ](画) ラ・セルナ
- (画) ラインハルト(演) ルットマン(映) ルオール(画)

同第六号 同年十一月

口絵 農夫 ケエテ・コルキツチ

ロッテルダムの煙草工場

帝展批判

帝展洋画部について

帝展四部工芸に就いて

仏蘭西展を見て

藤田嗣治氏を観る

吾々はどんな漫画を選ぶか

発声映画に於ける内容の問題

CINEMA

スクリーンに現れたカメラの位置の移動

カルチエル・ラタン

特別読物 演劇製作法

同第七号 昭和五年一月

口絵 FRAU MIT SCHLEIER

争議団の工場××

芸術に関する基礎的問題

新しき芸術へ 新工芸の提唱

映画・検閲雑考

今日の漫画を語る

マチスの一群に就て

口絵「争議団の工場××」に就て

プロ展について

プロ展を見てこんな事を思ふ

プロ展に関する文献

プロ展を中心に

美術研究事評 DA、B、C

A 築地の「西部戦線異状なし」 B 「建設の都市へ」 C 最

近の日本映画 D 一九三〇年協会の講演会を見て

BOOK REVIEW

ルマルク著「西部戦線異常なし」 中村 秀夫

秦 豊吉訳「若きソヴェートロシア」 長崎 卓二

秋田雨雀著「若きソヴェートロシア」 岡田 秀雄

中野重治著「芸術に関する走り書の覚え書」 小林 哲夫

蔵原惟人著「芸術と無産階級」

ソヴェエト・ロシアの映画界

演劇講座 演劇製作法 下 町田 成朗

第二巻第一・二号 同年二月

口絵 クラスナヤ・ニーバの表紙 デイネカ

如意輪観音

刷込写真 ロダン夫人の顔 ロダン 島 公靖

婦人像 石井 鶴三

ユニフェルズームの内部 メンデルゾーン

巻頭言

シュール・リアリズム批判

「超現実主義」の断章的批判 佐藤 敬

シュール・リアリズムは絶対に良くない 木下 幹一

檀原 健三

赤塚 時雄

木下 幹一

檀原 健三

最

中村 秀夫

長崎 卓二

岡田 秀雄

小林 哲夫

島 公靖

町田 成朗

島 公靖

「何が彼女をさうさせたか」を観る
大衆座の誕生

H K

論説

「美術研究」過去一年間の諸論文の批判

美術批評の階級性

今日の芸術と明日の芸術

芸術断想(一)

何を描くか?

浮世絵に対する新解釈

時代と彫刻

BOOK REVIEW

柳瀬正夢編「ゲオルグ・グロス画集」

板垣鷹穂著「機械と芸術との交流」

キンズブルグ著「様式と時代」

黒田辰男訳「超現実主義詩論」

作家及び作品の紹介

ロシアの漫画家ダイネカに就いて

伯林の子フーゴー、クラインの美術

エンリッヒ・メンデルゾーン

U・S・S・Rからの書翰断片

同第三号 昭和五年四月

口絵 ポール・ピカソ パブロ・ピカソ

新しい学校 ジーゴ・リベラ

挿画 飢え(デッサン) オットー・ディクス

デッサン ケエテ・コルウィツ

木版 カール・メッフェルト

巻頭言

階級社会の芸術(一)

卒業展批判

卒業展を中心に

卒業展の工芸

岡田君の美術批評の階級性を読んで

映画

超現実派の映画——主としてマン・レイの「ヒトデ」に就いて

トーキーとモンタージュ

作品・作家・生活

美術研究時評

「太陽の無い街」の感想

槐樹社の堀田橋本両氏の絵を見て

スタンラン

BOOK REVIEW

柳瀬正夢画集

プロレタリア音楽と詩

映画監督と映画脚本論

美術と機械

機械と絵画との関係に対する展望

機械主義と機械の階級性

ブドーフキン著 佐々木能理訳

岡田 秀雄

寺田精太郎

森 新一

榎原 健三

佐藤 敬

上村 研三

木下 幹一

榎原 健三

万田 稔

小林 良造

TM・O ゴーチェ抄訳

小林 良造

TM・O ゴーチェ抄訳

TM・O ゴーチェ抄訳

S・T

S・T

S・T

S 生

岡本 唐貴

永田 一脩

デュー・リベラについて

モデルをして居る女より

K子

執筆者の顔触れは、岡田秀雄、中村茂雄、小松益喜、木村郁太郎、山崎坤象、小野佐世男、須山計一が孰れも西洋画科昭和五年卒業。佐藤敬、淵上満夫、中村秀夫が同科同六年卒業。木下幹一が同科同七年卒業。檜原健三、春日清彦、町田成朗、寺田精太郎が同科同八年卒業。万田稔が同科同九年修了。中島正雄が金工科同五年卒業。高木勝四郎が鑄造科同年卒業、赤塚時雄が図画師範科同年修了。森新一、西村二郎、山村吉衛、関三郎、長崎卓二、村尾貞、保浦静二、上村研三、小林良造は卒業生名簿に名が見えず、中退者か、あるいは筆名と考えられる。岡本唐貴は大正十二年彫刻選科中退、永田一脩は西洋画科昭和二年卒業生で、プロレタリア美術運動の指導者格。村田良策は本校講師で昭和四、五年当時は英語、美学、色彩学授業担当。ここに明らかなように、執筆者は西洋画科生徒、就中、昭和五年卒業生が多かった。

『美術研究』を読むと、本誌が次第に左翼的傾向を強めていったことが分かる。既出『日本プロレタリア美術史』には本誌が学校当局によって発行停止処分を受けたので、これを校外に持ち出し、各学校、研究所有志の統一機関誌として『青年美術』が昭和五年十月に創刊されたと記されている。また、この『美術研究』や近代芸術研究部と太平洋画学校の太平洋近代芸術研究会、『線』の発行との関連については既に述べた(386頁参照)とおりである。

なお、同誌の発行停止は左の記事に記されている事件と関係があったことが推測される。

東京美術學校に『赤い』結社發覺

藝術による端的な運動に當局の眼特に光る

警視廳官房特高課では過般來祕かに活動を開始し、上野美術學校西洋畫科中村某同塑造科森某外數名の生徒を引致取調べてゐたが十七日一件書類丈送局して身柄は釋放し同時に一切を學校當局に通告して自治的處罰を促した、右は同校の左傾學生がナツプ(全國無産藝術聯盟)の美校出身者と連絡を執り『新藝術研究会』及び『近代藝術研究会』なる二つの團體を組織して校内の赤化を企てゝゐる事が發覺し檢舉されたものである

同校の左傾學生は豫て『五月會』なる祕密結社を作つてナツプや學聯一味と氣脈を通じて繪畫に依る赤化宣傳に努めてゐたが昨夏解散を命ぜられたのを再組織を企てたものであるが最近左翼學生の一派は當局の眼が可成隅々にまでとゞいて充分な運動が出来ない處から最も端的にして効果のある藝術に依る尖銳的な赤化運動を開始し相當の實績を擧げてゐるので當局でも細心の注意を拂ひ綿密な内偵を行つて慎重監視に努めてゐる

(昭和四年九月十八日『読売新聞』)

⑨ 白浜徹追悼講演會

本件については『東京美術學校校友會月報』第二十八卷第二号に次のように記されている。

○白濱教授追悼講演會 錦巷會主催のもとに、〔昭和四年〕五月五日午後二時より本校講堂に於て開催せり。